



## 鉄橋

札幌市医師会  
北海道がんセンター 荻田 征美

私が思い浮かべる鉄橋とは大きな河に架かった見るからに頑丈な鉄の欄干に囲まれた橋の事ではない。むき出しの鉄骨を組んだ櫓の上に枕木が並べられて固定され、さらにその上に鉄路が敷かれているだけの橋である。今の感覚で眺めるならば強い風が吹くと橋から列車が飛ばされてもおかしくない位、不安定な光景である。汽車が大量輸送の唯一の手段であった頃、道路の方も舗装などなく路面の事情が悪かった。そんな時の鉄路は最短距離であり、坂の起伏もなだらかで、格好の歩道として目に映り、汽車の通過しない時間帯には必然的に好都合の近道であった。

昭和27年の6月のことである。私たち家族にとっては戦後の極貧の時期を漸く脱し、生活の中に余暇を楽しむ余裕らしきものが出だした頃であった。夕張の炭鉱町に移って1年近く経ったある日曜日、珍しく父は母を町のデパートへ買い物に連れていくと言った。滅多に無いことなので、小学校5年生の私を頭に1年生の妹まで、子供心にも両親に気を遣って「おとなしく留守番してるよ。」と痩せ我慢をした。間もなく父と母がいそいそと出かけた後に、何か置いてけぼりを食ったような空疎な寂しさが残った。

父母が出かけて小一時間も経ったとき、小学校3年生の弟が思いついたように言った。「兄ちゃん、いつかの筏のどこへ行って見ようよ。」川の上流に選炭場があり川には石炭を洗った真っ黒な水が流れていた。それを少し川下の淀みに引き込んで炭砂を沈殿させ、上澄みだけ集めて粉炭とし

て燃料にするのである。池のようになった淀みには炭砂を集めるための簡素な筏が浮かべてあった。無論、子供達が遊ぶのは危険であるからきつく戒められている。しかし大人の目を盗みその禁を犯すことは子供のささやかな快楽を満喫させていた。他に思いつく事も無かった私は、つい「行ってみようか。」と言ってしまった。

行くと決めたら後先は考えなかった。少し道のりは有ったが、直ぐに目的の場所に到達した。生い茂った草を少しかき分け水の匂いのする中を軽い緊張を覚えながら直ぐに筏のある水辺に行き着いた。早速、3人で筏に乗り込んでみたが、子供達には決して漕ぎ出せる技術もなく、また筏もそんなに立派な代物でもなかった。でも一瞬、水の上に浮いた感触は3人を驚喜させた。そうこうしているうちに筏が少し岸から離れそうになった。その時、自分たちがその備えに万全でないことに初めて気がついた。右往左往しているうちに筏が傾き妹が筏からずり落ち、筏の端にしがみついたが腰まで水に浸かってしまった。3人で何とか岸辺に上がり、取り敢えずはホッとした。妹のスカートや下着は水浸しになった。衣類の端っこを摘んで水を絞ったが、思うようにいかず下着が濡れて肌にまとわりつき、妹は気持ち悪そうにした。そして「お兄ちゃん、もう、家に帰ろうよ。」と言った。「よし帰ろう。」と私も言い、3人で家路についたが、夢中で遊んだ所為か、思いの外時間が経っており、軽い疲労感があった。そこで川の上に架かっている鉄橋を渡って近道を帰ることにした。

鉄橋には保線夫が線路の点検に渡るため、二本の線路の間に人が歩ける位の板が置いてあったので歩いて渡ることは造作なかった。橋の真ん中あたりへ来た頃、何気なく下を見た妹は、自分が思ってもいなかった高いところに居ることに気がついて「お兄ちゃん、怖い。」と言ってしゃがみ込

んでしまった。枕木の間から見える下の川までは、転げ落ちたらひとたまりも無い。遊び疲れに加えて下着がべたべたしているのにも半分嫌気がしていたのであろう。そんな時、間の悪いことに遠くの方からしゅっしゅっという機関車が蒸気を勢いよく吐き出して坂道を上ってくる音が聞こえ、背筋に戦慄が走った。妹は依然、動こうとはしない。既に渡った先で弟が「兄ちゃん、早く早く。」と急かす。妹を背負って渡るにも板の幅が狭くその動作が危険であった。私は平静を装って、何とか妹を自分の意志で歩かせようとした。「橋を渡ったら少し休もうか。」「お母さん、もう帰っているかなあ。」「おみやげ、きつと、有るぞ。」等と言ってみたが一向に動こうとはしない。途方に暮れているうち、妹は少し疲れがとれたようで漸く立ち上がって歩き出した。線路は橋のところで急カーブになっており、傾斜は25/1000という1000mの距離で25mの落差がある、鉄道としては最大級の勾配であった。そのため汽車の速度は極めて遅く遠くまで見通せなかったの、列車は私たちを見つけて汽笛を鳴らすこともなかった。だが確実に汽車が近づいて来ているこ

とは振り返って見なくともわかっていて。それでも何とか渡りきって数分後に汽車を線路脇でやり過ごした。

午後2時過ぎ、家へたどり着いた。3人とも疲れがどっと出て、しばし放心状態でいるところへ父と母が帰ってきた。「お利口さんにしていたかい。」と言われたが、禁を犯したという後ろめたさから誰も即座に「はい」とは言えなかった。そのうち母は私たちが何も食べていないことに気が付き、「まだお昼のパンがお店にあるかも知れないから、買っていらっしゃい。」と言って、私に小銭を手渡した。家についた時には安心感から子供達三人とも暫く虚脱状態だったが、言われて急に空腹を感じた。私は通りのパン屋にコッペパンを買いに出かけ、僅かに売れ残っていたのを求めた。

手渡されるのを待っている間に店のラジオから流れる曲が耳に入って来た。昭和24年に制作され、その後日本でも上映されたアメリカ映画「第三の男」で有名となったアントン・カラス作の主題曲であった。一日中、強い日差しを受け続けた疲れから、チターの音がやたらけだるく響いた。

## 石狩川

胆振西部医師会  
北湯沢温泉病院

御園生 潤

医学部学生の4年目(学2)のころ、趣味の鉄道写真の撮影で上川地方へ足をのばしたことがある。旭川で国鉄の普通列車を乗り継ぎ石北本線の普通列車を利用して、上川駅のいくつか手前の中愛別の駅で下車し、徒歩で撮影目的の場所へと向かった。季節は秋・紅葉の盛り。ほぼ一日かけて、札幌と網走を結んでいる特急「オホーツク」を始めとした多数の列車の姿を、好天のもと、リバーサルフィルムにおさめることができた。

石北本線も函館本線も、北海道の母なる川・石狩川と、つかず離れずして走行し、途中何度も、石狩川を橋梁でまたぐ。この時の私の撮影ポイン

トは中愛別近くの橋梁と安足間(あんたろま)駅。石狩川の清流と緑色の鉄道橋梁、バックには冠雪した大雪山連峰。石狩川も、このあたりまでくると川幅も狭く、列車を待つ間には河川敷の砂利の上で、携行していったお弁当を食べたり、当時は、比較的ナウい存在であったウォークマンを聴きながら、のんびりとした10月の好天の一日を過ごしたものである。この日のリバーサルフィルムの仕上がりは思いの外良好で、翌年の年賀状(ポストカード)へと抜擢された。

石狩川は、大雪山系・石狩岳にその源を発する。流れ下るにつれ大小70余りの支流を合わせて北海道随一の大河川・石狩川になる。

上川、空知、石狩の大平野を形成しつつ48にも及ぶ市町村を通過し、流域の広さは北海道全体の6分の1に達するという。流域に住む人々の数は約300万人。様々な暮らしのシーン・感情を溶解し満々と流れる姿は北海道の文化・歴史をも刻み込み、まさに「母なる川」といえると思う。また

流域には、大雪山ならびに支笏・洞爺国立公園を含む、豊かで貴重な自然が多彩に展開している。

石狩川の語源は、アイヌ語「イ・シカラ・ベツ」(曲がりくねった川)に由来する。春の雪解け、あるいは夏～秋期の台風や秋霖による集中豪雨で増水・氾濫し時として多大な被害をもたらした多くの人々を悩ませてきた。石狩川の歴史は、まさに治水との戦いであったと言えよう。

本庄睦男の「石狩川」をお読みになされている諸兄にはお判りと思うが、石狩川にまつわる歴史的事象と開拓の苦労を巧みにおりませつつ表現した「石狩川興亡史」とも形容される一冊であり、モデルとなった石狩川下流域の当別町と、明治初期にその地へ移住した仙台藩・岩出山領主・伊達邦直主従が中心となり当時のなかなか治めきれない「石狩川」の姿を多角的に描写している。

開拓開始以来、130年余り。ほぼ10年に1度の大水害に見舞われ、近年に到るまで、その記憶が生々しい。中でも明治31年9月の水害は、石狩川の大氾濫を生ぜしめ、石狩平野のほぼ全域が水没し鉄道、道路網にも致命的なダメージを与えたという。決して少なからぬ死亡者・行方不明者数が出たと記録は物語る。



現在の石狩川の流路を出張などの折に航空機から俯瞰すると、いくつもの三日月湖が形成されており、治水事業の努力による流路の直線化・ショートカット化が懸命に進められてきたことがうかがえる。私の自宅の石狩市にも石狩川の本流のショートカット化によって生じた旧石狩川の蛇行した流れと、増水時のシャントとして近年の洪水の教訓を生かして掘削された「石狩川放水路」が余剰水量を石狩湾に放流し、石狩川水系の水量の至適調節に大いに貢献している。こうした部分は冬季間には全面結氷し、ぶ厚い氷にドリルで穴をあけ、七輪などで暖をとり、わかさぎ釣りなどにいそしみ、その場で、カラ揚げなどにして舌づつみをうつ人々が色とりどりのテントを構えるのも時の風物詩とはいえる。

石狩川は歴史的にみても、川筋を通して舟で物資を運ぶ水路として、内陸の開拓に不可欠な稲作の用水路として、また鮭の遡上する道としてなど

様々な表情を見せ続けてきた。北海道遺産認定を契機に、石狩川を中心とした歴史の見直し、伝統漁法の復活などが試み始められている。カヌー、釣り、バード・ウォッチングなどの暮らしに比較的身近な活用術から地域の意見をも取り入れた河川作りのために多様な取り組みがなされ、少なからぬ成果が上がっているという。

現在でも私は、時々列車で、札幌→旭川→上川と行程をたどり石狩川の様々な姿を列車展望することがある。冒頭に記載した学生時代(昭和58年10月15日)に訪れた周囲の景観も健在であり、自然を満喫できるようである。この時の貴重なリバーサルフィルムも大切に保管されており色あせてはいない。現在の私の居住地「石狩市」は、私が転居してきてから経過したこの13年の間に大きく変貌を遂げたが、「石狩川」は相変わらず、豊富な水量を有して悠々と流れ、私にとっては、何かしら、どこことなく「ぬくもり」を感じさせてくれる河川であることに変わりはない。

